「モノと情報」班 C

ミャオ族の民族衣装が結ぶ文化
－モノ研究の視点から－

宮脇千絵（総合地球環境学研究所「モノと情報」班）

キーワード：ミャオ族、民族衣装、中国雲南省、ラオス、流通

Culture Connected by Miao Clothes
－ From the Viewpoint of Study on Things －

Chie MIYAWAKI (Research Institute for Humanity and Nature)

Keywords: Miao, Clothes, Yunnan Province, Laos, Distribution

1. はじめに

モノは私たちに様々な情報を与えてくれる。例えばひとつのモノからでも、その形状や材質、素材の入手法や製作方法・過程、使用法（いつ・誰が・どこで・どのように）、売買や交換、流通、分布、時代など多様な側面からアプローチすることができる。

近年、グローバリゼーションの視点からモノを見つめなおす試みが起こってきている〔内堀 1997〕。これまで、モノはひとつの文化内で捉えられることが多かった。しかしそこに留まらず、文化の枠を飛び越えて世界的規模で流通するようになった状況の中で、モノをいかに議論するかという問題が浮かび上がっている。

筆者自身、モノを単にモノとして扱うだけでなく、モノを通して社会や人々をみることに興味を持ち、またモノがどのような状況で文化の枠を飛び越えているのかということに着目してきた。本稿では、ミャオ族の民族衣装というモノを事例に取り上げ、これまでの研究をまとめる。

2. ミャオ族の民族衣装の既製品化と流通

修士論文〔宮脇 2003a；2003b〕では、中国の雲南省紅河ハニ族イ族自治州屏辺ミャオ族自治県（以下、屏辺（ピンビエン）県）におけるミャオ族の民族衣装売買について取り上げ、モノ研究の視点から、モノがグローバルな規模で移動する状況について論述した。

屏辺県はベトナムとの国境から約 100km のところに位置し、自治県名が雲南省唯一のミャオ族のみが構成主体となっている自治地域[1]である。総人口約 13 万人のうち、ミャオ族の人口比は約 38％であり（1990 年）[2]、ミャオ族のみならずイ族、ヤオ族などでも多くの女性が、現在でも普段から民族衣装を着用している。だが、ミャオ族の民族衣装は他地域のミャオ族の民族衣装と比べて、明らかに新しさを感じる。昔ながらの技術を受け継いで作られた民族衣装を期待していた私にとっては、薄い化繊の布やカラフルなプリント、科学染料の糸での刺繍、蛍光色のプラスチックビーズがとても異色なものとして映った。この屏辺県では、他のミャオ族居住地域ではみられない民族衣装に関する新たな現象が起こっている。

屏辺県の県城である玉屏（ユービン）鎮の町では、従来、家庭内で製作・消費されていたミャオ族の衣装が、1980 年代から徐々に町の商店で製作・販売され始めている。その商店の多くはミャオ族女性の経営で、2002 年の時点で十数軒あった。雲南省では、定期市の日に露店で既製の民族衣装が売られている光景をしばしば目にすることができる。しかし、玉屏鎮のように専門の店が建ち並ぶというのは珍しい。玉屏鎮に住むあるミャオ族の男性の話によると、既製の民族衣装を扱う商店は、この屏辺県と隣の文山チワン族ミャオ族自治州でしかみられないという。

もともとミャオ族の衣装製作は、麻の栽培から始まり、収穫、糸紡ぎ、織り、ロウケツ染め、刺繍などと多数の工程に渡った〔顔 2001：11-19〕。そして衣装製作は、家事や労働の合間に行う女性の重要な仕事であり、一枚のスカートを製作するのに約 10 ヶ月かかっていたという。だが玉屏鎮で新しく製作されるようになった民

族衣装は、化繊の布や機械刺繍、チロリアンテープやプラスチックビーズなどを使用し、ロウケツ染め風にプリントを施し、ミシンで縫製される。多くの商店では、女性たちが店先に並べたミシンで次々とスカートや上着を縫い上げていく。中には家族経営の小規模な工場があり、そこでは布の裁断、ロウケツ染め風のプリント、ミシン、ビーズ縫いを分業にしている。

商品となったミャオ族の衣装の流通経路は多様である。週に一度の定期市の日には、県内の村落から買い物に来たミャオ族の女性たちが客となる。また近隣県からは、ミャオ族の衣装売買を生業としている人が仕入れに来ることもある。北京などの都市へ土産物や記念品として流通していくものもある。さらに工場では、アメリカに在住するミャオ（モン）族[3]の人々とも電話や FAX で取引をしている。工場のオーナーの夫の話によると、1992 年にアメリカ在住のミャオ（モン）族の人々が、雲南省に同胞を訪ねる旅行に来たのがきっかけだという。取引された衣装は、アメリカを経由してさらにラオスのミャオ族にまで流通しているという。

3. 文化を結ぶ民族衣装

注目すべきは、屏辺県におけるこれらの既製の民族衣装がいわゆる観光客向けの工芸品ではなく、あくまでミャオ族自身が消費する実用的なものだという点である[4]。貴州省のミャオ族は、民族衣装を含む少数民族文化を観光資源として変容させてきた〔曽 2001〕。しかし屏辺県は、貴州省の場合とは異なり、観光化されず他者からの「まなざし」を受けてこなかった。だからこそ製作者や消費者の要望によって、民族衣装の素材や製作工程の合理化・簡略化が進み、デザインも自由に変化しているのである。

屏辺県で製作されたミャオ族の衣装の特徴として、「まなざし」に左右されない実用品として、近隣の村や県のみならず、アメリカやラオスにまで流通している点を指摘することができる。

雲南省はラオスと国境を接しているにも関らず、もともとミャオ族同士の少数民族レベルでは国境を越えての関係性がとても薄かった。その理由として 2 点考えられる。まず、新中国成立以来、社会主義建設のために求められたのは、漢族との関係であり、国外の同一の民族集団ではなかったということである〔谷口 1992：141〕。そして、1990 年に国境貿易が推奨されてから、国境貿易の拠点が各地にできているが、実際に直接的利益を得るのが主に漢族だということがある〔松村 2000：110-111〕。筆者が屏辺県のある男性に、なぜラオスと直接取引をしないのかと尋ねたときも、ルートや方法が分からないからだという答えであった。

この事例では、ミャオ族の民族衣装は、アメリカを経由してラオスに渡っている。そして、ラオスからはアメリカを介して VCD が屏辺県にもたらされている。この VCD は、アメリカ在住のミャオ（モン）族の人々が、ラオスを訪れた際に撮影したもので、ミャオ語のドラマやミャオ族の歌や舞踏などが収録されている。直接的な関係性が薄かったにも関わらず、屏辺県の民族衣装製作に関わっている人たちは、ラオスのミャオ族の情報を得られるようになったのである。衣装というモノによって両者の関係が結ばれているからこそ、屏辺県のミャオ族は、ラオスのミャオ族に衣装や言語、文化などの一致あるいは類似から親近感を得るようになったと言えるだろう。

4. 今後の課題

このように、衣装というモノがひとつの文化の枠を飛び越え、文化間の関係を結んでいる状況についてみてきた。しかし、修士論文では雲南省の事例しか言及できず、屏辺県で製作された衣装が、アメリカやラオスのミャオ族の人々にどのように受け入れられてきたのかという課題が残った。自由の国アメリカと社会主義国家であるラオスでは、ミャオ族の人々の位置づけとともに、衣装の受容のされかたが大きく異なることが推測される。アメリカ在住のミャオ族の間では民族衣装が、ある種政治性を帯びた特別なエスニック・シンボルになっている可能性がある〔乾 1998〕。一方ラオスでは、普段着のレベルで屏辺県の衣装が受け入れられているといっても、国内に散在するミャオ族の集落においてどのように受容され利用されているのかを詳細にみていく必要がある。つまり、単に同じ民族だから同じモノ（衣装）を使用しているという前提だけでは捉えきれない状況が展開しているのだ。モノの分布を単に地図上に示すだけではなく、分布の過程や背後の詳細ついても検討する意義は大きい。グローバルな分布の様子から、ローカルな社会や人々の動きまで読み取ることができるのである。

筆者はこれまで博物館で資料点検の仕事に携わってきたこともあり、博物館に収められている民族資料の形状

や材質について、数多くとは言えないまでもある程度、実際に手にとって観察する機会を得てきた。この経験を生かしつつ「モノと情報」班では、個々のモノが持つ情報を多角的に引き出し、社会や人々の変化を知る手がかりとなる情報へと膨らませることができればと考えている。生態史プロジェクトの対象地域となる雲南省から東南アジア大陸部にかけてのメコン河流域地域は、起源を同じくするとされる民族が数多く散住する地域である。そのような地域で、モノが文化や国境を越えて分布している状況や背景を体系的に捉えていきたい。

参考文献

乾美紀
1998「故郷を失ったモン族」『季刊民族学 84 号』財団法人千里文化財団
内堀基光
1997「ものと人から成る世界」『岩波講座文化人類学第 3 巻 「もの」の人間世界』岩波書店
曽士才
2001「中国における民族観光の創出－貴州省の事例から－」『民族学研究　第 66 巻第 1 号』
谷口裕久
1992「「ミャオ」カテゴリーのアイデンティティの位相」『社会学雑誌 9』神戸大学社会学研究会
宮脇千絵
2003a「衣服というモノの多様性・可変性・オルタナティブ－中国雲南省のミャオ族の事例から－」神戸大学大学院総合人間科学研究科
2003b「ミャオ族の衣服の商品化と流通－雲南省屏辺ミャオ族自治県の事例から－」神戸大学国際文化学編『国際文化学第 9 号』
松村嘉久
2000『中国・民族の政治地理』晃洋書房

[1] 雲南省にはミャオ族が構成主体となる民族自治地方が他に、文山チワン族ミャオ族自治州、録勧イ族ミャオ族自治県、金平ミャオ族ヤオ族タイ族自治県があるが、屏辺ミャオ族自治県以外は、複数の少数民族が構成主体となっている。

[2] 屏辺県の人口比は漢族約 41%、ミャオ族約 38%、イ族約 18%、チワン族約 2% である（1990 年）。

[3] ラオスのミャオ族は、ベトナム戦争時にアメリカ軍のゲリラ部隊として組織されたが、アメリカの敗戦後、共産主義の中に置き去りにされ迫害されるようになった。そこでタイに逃れ、アメリカ、カナダ、フランス、オーストラリアなどに難民として移住するようになった [乾 1998：105-106]。

[4] 筆者の取り上げた事例の中には、工芸品として北京などからの注文を受けている商店もあったが、その場合は従来の方法で製作された民族色の強い伝統的な衣装が好まれている。そのような商店は、現在でも手織りの麻布、ロウケツ染め、手刺繍の民族衣装を製作している村を知っており、注文が入った時に仕入れている。昔ながらの民族衣装は、希少価値があり、高く売れるのだという。